



KAGOSHIMA Y'S MEN'S CLUB

No.368 2021
鹿児島ワイズメンズクラブ

8月号

国際会長 : Kim Sang-chaе [韓国] 世界とともにワイズメン Y's Men with the World
 アジア会長 : 大野 勉 [神戸ポート] 100年を越えて変革しよう Make a difference beyond the 100th
 西日本区理事 : 新山 兼司 [京都トップス] Challenges for the future 未来への挑戦
 九州部部长 : 森 律子 [八代] 小さなことにも大きな愛を込めて。そして未来へ
 With great love for the little things And towards the future...



SDG's を鹿児島で!

It's time to think about SDG's in Kagoshima.

鹿児島クラブ会長 中堀 清哲

2021-2022年度 7月キックオフ例会報告

7月から中堀清哲新会長のもと、「SDG'sを鹿児島で!」を主題に掲げ2021-2022年度鹿児島ワイズメンズクラブはスタートしました。SDG'sを達成することはワイズメンズクラブの綱領と目的を達成することと共通点が多いです。目標を達成するために一歩ずつ、出来ることから始めましょうと挨拶をしました。昨年4名の退会があり、寂しいスタートになると思いきや、驚きのサプライズがありました。昨年から体調を崩され、長期入院し、リハビリをされていた山下早容子さんがご主人と一緒に出席されました。



驚きと嬉しさで全員興奮気味で、一気に例会の雰囲気明るくなり和みました。本当に素敵なキックオフ例会になりました。

コロナ禍でまだまだ油断のできない状況ではありますが、体調に気をつけて日々の生活を過ごしていきましょう。



TO ACKNOWLEDGE THE DUTY THAT ACCOMPANIES EVERY RIGHT



会長通信

鹿児島クラブ会長 中堀 清哲

SDG's を鹿児島で!

It's time to think about SDG's in Kagoshima.



鹿児島ワイズメンズクラブの2021年8月例会は新型コロナウイルスの再びの蔓延により、オンラインによる開催に変更させていただきました。非常に残念で悔しい思いさいたしますが、ウィルスの変異株に対しては今のところは日本では為す所がない状態です。このような状況下ではオンライン例会にせざるを得ません。会員の皆様におかれましてはなにとぞご理解いただきますようお願いいたします。何とかこのコロナ禍を乗り越えて、サバイバルして晴れて対面の例会がすぐ出来ますように願うのみです。

今から約100年前の1918年から1920年にスペイン風邪が流行しパンデミックを引き起こしております。当時の人口18億人の約半数から3分の1が感染し、5千万人以上の人々が亡くなったそうです。当時の新聞記事を読んでもみると、現代に起こったこのコロナ禍に関する新聞記事と書かれてあることが余りにも共通することに驚きを覚えました。歴史は繰り返すといいますが、本質的に人間は何も変わっていないと感じました。やはり、感染症は人間が集団免疫を獲得するまでは何度も繰り返し流行の波は来ることを覚悟せねばなりません。今回、オリンピック委員会や日本政府はこの辺りを甘く見ていたのではないのでしょうか。100年前はパンデミックの後にワイズメンズクラブが産声を上げましたように今、またアフターコロナにはワイズメンズクラブが再発展することを願いつつ、自己研鑽と心の準備をするときであると思います。



理事通信

西日本区理事 新山 兼司

Challenges for the future
未来への挑戦



未だに収束に向かって進まない新型コロナウイルス、コロナ禍の中、今期最重点目標である会員増強・300名退会防止対策に向かって各部EMC懇談会やEMCシンポジウムが開催されました。

7月3日西中国部では、困難な状況にある福山・東広島クラブの生の声を聴き、西中国部の仲間では何が出来るかを模索されました。

7月4日九州部では、各部長よりクラブの現況及び今期の会員増強目標数に対して会員増強対策などの発表をされました。

7月17日中西部では、冒頭、牟部長より「中西部はこのままでは部の存続の危機に至る。今期中に会員増強を何とかしなければならぬ。」と言われたことが印象に残っています。

山口雅也EMC事業主任の基調講演では、西日本区の会員数の状況、毎年会員数が減少している表、同時に中西部の会員の状況、同じく毎年会員数が減少している表を出され、今期劇的に会員増強をしなければならない。その為の施策となる講演をして頂きました。

事前に西日本区各クラブから今期の会員増強目標数を確認しましたところ、全体で283名の会員増強目標総数があがってきました。

会員を増やすことでクラブ内の雰囲気が変わり事業拡張にも繋がっていきます。

ただ単に会員数を増やすことでは無く、入会された方々が心の底からこのクラブに入って良かったと思うクラブにして頂きたいと思えます。

7月22日は、瀬戸山陰部EMCシンポジウムが開催されます。

各部の皆様が真剣に取り組み、何とかワイズメンを増やしたいと思う気持ちが熱く伝わってきます。西日本区EMC事業員会・西日本区EMCアドバイザー・ワイズ将来構想特別委員会と連携し西日本区の皆様と共に目標の会員増強が出来るよう努力したいと考えています。

会員の皆様の健康を考えながら、ワイズメンズクラブ創立100周年、東西日本区25周年に向かってワイズの活力を取り戻し、活気溢れる西日本区にしなければなりません。

現状を打ち破りワイズメンとしての誇りを持ち、自らの成長と共にクラブの発展に繋げて頂きたいと思えます。

西日本区各クラブの未来への挑戦のはじまりです。

共に邁進しましょう!

泳げないのに泳いだ

神村 浩

歳をとると昔の話をしたがるものです。私が小学校3年生の頃に生命の危機に遭遇した体験談です。当時はまだ戦時中のことで満州から帰国し、父の郷里である半農半漁の村で暮らしていた。郷里で体験することは、満州での恵まれた生活とはあまりにもかけ離れていた。

村を流れていた一本の川は少年時代の恰好な遊場であった。恰好な遊場でも生命の危機に見舞われることもある。

ある日友達が地引網に行こうと誘ってくれた。初めての経験で喜び勇んでついていった。現場に行くにはその川を渡らなければならなかった。渡ると云っても水深は膝ぐらいで歩いて渡った。邪魔であったであろう子供達を大人は心良く仲間として扱ってくれた。網を引く労働の報酬として大きな魚を一匹もらった。初めて得た報酬に自分を誇らしく思ったものだ。漁も終わった頃にはすっかり暗くなっており、皆一斉に引き上げた。

さっき歩いて渡った川にさしかかると、満潮時の河口は大河に変貌していた。満州から帰国した私は泳ぎを知らない。私は茫然と立ちすくんだが、そんな私を気にかける人はいなかった。皆が帰り去った後、暗闇の中に一人取り残れてしまった。立ちすくむしかなかったが、通る人がだれもない。

意を決して渡ることにした、水深はすぐ胸を越えてしまった。死ぬか泳ぐかしかなかった。泳げないのに泳いだ？ 対岸にやっとたどり着くと、洋服は投げ捨てていたが、魚だけはしっかり握っていた。

命をかけて持ち帰った魚を誇らしげに母に差し出すと、母は魚には目もくれず「こんな暗くなるまで何処で遊んでいた！」と一喝された。

自然を甘く見ていると大変な目に会うことを知った。それは昔も今も同じだろう。

07 企画例会報告 Planning meeting report

日 時：令和3年8月10日 火曜日
19:00 ~ 20:00

場 所：Zoom

出席者：神村、中堀、園屋、徳田、松若、松永

06 定例会報告 Planning meeting report

日 時：令和3年7月27日 火曜日

場 所：鹿児島国際交流センター

出席者：10名

司会者：徳田

7月例会の記録

クラブ在籍者	10名
出席者	8名
メネット	0名
ゲスト	2名
ビジター	0名
メイクアップ	0名
7月出席率	80%



モクセイ科の常緑高木。実が食用油(オリーブ・オイル)の原料や食用になるため、広く栽培されている。果実は油分を多く含み、主要な食用油の一つであるオリーブ・オイルの原料である。古代から重要な油糧作物として知られている。また原産地が西洋文明の発祥区域であった地中海沿岸であるため、旧約聖書で鳩がオリーブ(עֵץ זַיִת)の葉をくわえて帰ってきたのを見てノアは洪水が退いたことを知った(『創世記』8章11節)という記述をはじめ多くの文化的記録が残っている。葉が小さくて硬く、比較的乾燥に強いことからスペインやイタリアなどの地中海地域で広く栽培されている。小豆島での栽培は1910年頃に初めて成功した。現在は香川県を含む四国全域、岡山県、広島県、兵庫県、九州、関東地方、中部地方、東北地方など全国各地で栽培されている。宮城県石巻市が東日本大震災からの復興の一環として、「北限のオリーブ」栽培に取り組んでいる。2015年からはさらに北方の北海道豊浦町でも栽培が行われている。日本で新たな品種も育成されており、香川県が開発した「香オリ3号」「香オリ5号」が日本発で初めて品種登録に至った。

今月の聖句

兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。
農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。
あなたがたも忍耐しなさい。心を固く保ちなさい。主が来られるときが迫っているからです。

ヤコブの手紙 5章7～8節

鹿児島YMCA報告

鹿児島県独自の緊急事態宣言、またその後のまん延防止等重点措置法施行に伴い、不安が消えない日々となりました。新型コロナウイルスによって苦しみや悲しみを覚えた全ての方々が一日も早く癒されることを心より祈る日々です。

さて、時がさかのぼること2週間前。8月10日から12日の2泊3日の日程で2年ぶりとなる、チアダンスのサマーキャンプを開催することができました。事前の準備段階コロナ禍でのキャンプの在り方を何度も何度も話し合い、施設とも協議の上、最終的に国立大隅自然の家にて、参加者数を絞った形（今回はスタッフ合わせて60名）で実施しました。

今回のキャンプでは、仲間と共に3つのテーマを考えることが目的となりました。

一つ目は、「あきらめない」ということ。コロナ禍において、色々な計画が出ては感染状況を考慮して中止を繰り返してきました。思い通りにならない日常にあっても、チアダンスで頑張る目標、目的を忘れずに日々頑張っている子どもたち。あきらめないということはどういうことなのか、それは弱さと向き合い、乗り越えていくために必要なこと、必要な存在、そういったことを「あきらめない」というキーワードと共に学びを深めました。

二つ目は、「ポジティブに」ということ。YMCA運動とはでポジティブネットのある社会実現を目指して活動する運動体。ポジティブな思考を育むことで広がる関係性こそ、YMCAの理念。コロナ禍だからこそ、ポジティブにあるためにどのように心を育むのかということと向き合う時間をこのキャンプの中で創出することができました。

三つ目は、「互いに認め合い、高めあう」ということ。キャンプでは互いの違うところを認め合うこと、そしてその違いを争いの種にするのではなく、高めあうためにどうしたらよいかを考えるキャンプでした。1泊2日では楽しかったで終わるキャンプ。しかし2泊3日では必ず争いごとが起きます。案の定、仲が深まるとともに、2日目の夜には小さな争いはたくさん起こりました。争いのもととなった違いを認め合うことを覚えた子どもたちは、最終日となった翌日、仲直りと共に高めあっているシーンを見つけることができました。

3密を避けるが叫ばれ、社会常識の変容を求められてきたこの1年半。改めて思うことは、密は素晴らしいということです。フィジカルなディスタンスはコロナが収束するその日まで必要なことではしょうが、心のディスタンスは変わらず密接でありたいと思うキャンプでした。

鹿児島YMCA 新内 博之

